

『大西祝・幾子書簡集』の刊行に寄せて

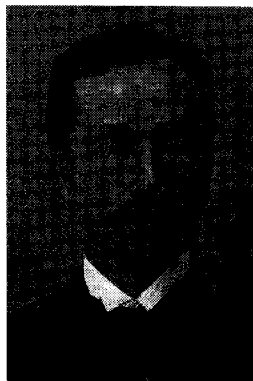
平山洋

今からもう十年近く前のことになる。初めて大西祝の著作を目にしたとき、一八九〇年代という時代的な制約にもかかわらず、なおもあらゆる対象への徹底的批評を实践しえた思想家が日本にもいた、ということに、私は少なからぬ衝撃を受けた。

いったいどうしてあのように明晰な「批評主義」を実践しえたのだろうか？そしてどのようにしてあの該博な哲学的知識を獲得したのか？私はそうした素朴な疑問を出発点として研究を進め、四年前に評伝研究『大西祝とその時代』

(日本図書センター刊)をまとめたのだが、それを書き進めるにあたっては資料の不足に悩まされた。彼の死後すでに九十年、伝記を書くための第一次資料はあまりに限られていたのである。

しかし、もはや大西の人となりを知るための資料の不足を嘆く必要はなくなった。なぜなら、彼の手になる二四〇通の書簡と、妻幾子や親戚・友人・知人からの手紙五百通弱が収められた『大西祝・幾子書簡集』(以下・本書)が上梓されたからである。本書によって、公刊された著作による以外にはほとんど知られる



大西祝の肖像
(年月・画家とも不詳)

ことなかつた彼の生涯やあるいは人格ともいべきものが明らかになった。

以下では本書の構成を概説し、さらに今までの伝記的事実につけ加わったことどもを挙げ、そして最後に本書の意義について簡単に述べたい。

本書の構成

本書は、一九八四年六月と八六年十二月との二回にわたって早稲田大学図書館に大西祝の令孫大西真氏から寄贈された未公刊の書簡二千余通のなから、祝と夫人幾子および友人・知人・親戚等と取

り交わした書簡七百余通を選んで翻刻・編集したものである。その目次は以下の通りである。

第二章 祝宛て独逸留学期

(一八九八〜一九九九年 三一通)

第三章 皆々様宛て 祝の帰国後および没後

(一八九九〜一九〇二年 七通)

幾子の友人たち 村上直次郎

第三部 親戚および知人友人より祝、幾子宛て(合計四三三通)

第一章 親戚より祝および幾子宛て

(一八七七〜一九〇〇年 四八通)

木全正脩 木全嘉代 木全多見 木全鶴 岩田善明 大西秀 大西絹

松井米吉郎

第二章 知人友人より大西祝宛て

(一八八四〜一九〇〇年 三七八通)

朝河貫一 姉崎正治 安部磯雄 井上門了 浮田和民 内村鑑三 海老名弾正 大塚保治 加藤弘之 小崎弘道 島村瀧太郎 高山林次郎 谷本富 網島栄一郎 坪内雄蔵 戸川安宅 徳富猪一郎 外山正一 新島襄 原田助 元良勇次郎 湯浅吉郎 横井時雄 など一〇八名二団体

第三章 追悼 知人友人より幾子および遺族宛て

(一九〇〇〜一九〇一年 一七通)

朝河貫一 安部磯雄 井上門了 井上哲次郎 菊池大麓 山路弥吉など一七名

第四部 大西祝関係資料

目次からも想像されるように、本書の内容は非常に豊富である。伝記的新事実については次節で扱うことにして、まずは構成を概説したい。

第一部の第一〜第三章は、結婚前の祝が幾子に宛てたラブレターに始まって、欧州留学中の日常生活と、帰国後の京都帝国大学への単身赴任での生活の報告によって占められている。留守をあずかる若い妻に宛てた手紙であるから、彼の学問的関心についての手がかりは少ないものの、かえって祝の人格を知るための格好の材料となっている。

第一部第四章は、実母木全嘉代、同志社での友人である徳富猪一郎や湯浅吉郎、東大での友人大塚保治や谷本富、早稲田での教え子朝河貫一・戸川安宅、幾子の妹末子や兄米吉郎への手紙である。

第一部 祝より幾子および親戚、知人友人宛て(合計二四〇通)

第一章 幾子宛て 婚約、結婚より独逸留学前まで

(一八九三〜一八九七年 四三三通)

第二章 幾子宛て 独逸留学期

(一八九八〜一八九九年 一一八通)

第三章 幾子宛て 留学より帰国後

(一八九九〜一九〇〇年 一五通)

第四章 親戚および知人友人宛て

(一八八三〜一九〇〇年 六四通)

朝河貫一 大塚保治 木全嘉代 N

・河野 谷本富 戸川安宅 徳富猪一郎 二見仙太郎 松井末子 松井米吉郎 湯浅吉郎 市島謙吉

第二部 幾子より祝および知人友人宛て

(合計五一通)

第一章 祝宛て 婚約、結婚より独逸留学前まで

(一八九三〜一八九六年 一三三通)

第二章 追悼 知人友人より幾子および遺族宛て

(一九〇〇〜一九〇一年 一七通)

朝河貫一 安部磯雄 井上門了 井上哲次郎 菊池大麓 山路弥吉など一七名

第四部 大西祝関係資料

目次からも想像されるように、本書の内容は非常に豊富である。伝記的新事実については次節で扱うことにして、まずは構成を概説したい。

第一部の第一〜第三章は、結婚前の祝が幾子に宛てたラブレターに始まって、欧州留学中の日常生活と、帰国後の京都帝国大学への単身赴任での生活の報告によって占められている。留守をあずかる若い妻に宛てた手紙であるから、彼の学問的関心についての手がかりは少ないものの、かえって祝の人格を知るための格好の材料となっている。

第一部第四章は、実母木全嘉代、同志社での友人である徳富猪一郎や湯浅吉郎、東大での友人大塚保治や谷本富、早稲田での教え子朝河貫一・戸川安宅、幾子の妹末子や兄米吉郎への手紙である。

その中でもとりわけ徳富への手紙は祝の思想形成を追求するにあたっての第一級資料である。大塚・谷本といった東大以来の友人たちへの書簡は留学先からのものが多く、ドイツでの勉強の内実が分かるようになっていた。

第二部は、全体が幾子から祝や彼の友人に宛てられた手紙である。なかでも第二章は留学中の祝へのもので、留守を預かる幾子の奮闘ぶりを知るのに役立つ。

第三部第一章は、親戚からの書簡類である。郷里岡山から京都に移った一八七七年に始まる両親木全正脩・嘉代、長兄木全多見、次兄岩田善明、母方の祖母大西秀、叔母大西絹からの手紙は、多くの新事実を明らかにした。

第三部第二章は、大西のもとにもたらされた友人・知人たちからの手紙で構成されている。同志社・東大・早稲田と近代日本の基礎を築いた多くの人々を輩出した三つの学校に関係していただけあって、差出人の豪華絢爛たる顔ぶれにはただただ啞然とするばかりである。新島襄の高弟にして徳富をはじめ横井時雄・安部磯雄・浮田和民とは同志社以来の親友

の間柄、大塚保治・高山林次郎（樗牛）らは大学のクラスメイト、そして島村瀧太郎（抱月）・網島栄一郎（梁川）らは早稲田の教え子である。まるで明治文化人のパノラマを見ているようだ。

さらに第三部第三章は祝の没後に寄せられた追悼文であり、また第四部は、祝の成績・願書・辞令などの資料が一三点収められている。

以上が本書の構成の概略である。次に新たに明らかになった伝記的事実について述べたい。

伝記的新事実

大西祝は一八六四年八月に岡山藩士木全正脩の三男として生まれた。七五年にプロテスタントの宣教医のワレレスII テーラーが岡山で初めて説教をしたのがきっかけで、木全・大西家の人々は次々キリスト教に入信した。そのため七七年に祝は同志社に入信したのであるが、今まで京都に移った日付は明らかではなかった。それが一月十八日であったことが長兄多見の手紙（書簡番号／第三部一・3・一）によってはっきりした。

同志社時代の祝については徳富猪一郎宛の書簡と原田助からの手紙が彼らの問題関心をよく伝えている。その頃祝はキリスト教研究に没頭し、聖職をめざしていたようである。聖書以外に文中によく出てくるのは、シェイクスピア、ミルトン、ロングフェローといった人々の作品である。こうしたことから、同志社の教育がアメリカの中等教育に範をとったものであったことが確認できる。

また、祝から実家に宛てて出されたはずの書簡はほとんど残っていないが、反対に親戚からの手紙はよく保存されているために、彼のために実家がどのような援助をしたかが分かる。とりわけ遠隔の地で勉学に励んでいる息子に対して、父正脩は学費ばかりではなく篤い精神的な支援も送っていたことが確認できた。これまで松村緑の研究「大西操山雑記」（東京女子大学『日本文学』一四号、一九六〇年）によって、母嘉代・伯母中川雪・叔母大西絹ら母方の親戚が祝の精神に与えた影響が重要視されてきたが、本書によって初めて読むことが可能となった父正脩や長兄多見の書簡から、男系の

近親者もまた非常に立派な人々であったことが伺われる。

さらに、正脩からの手紙（第三部一・1・七）によって、祝が正式に大西家の家督を相続したのが一八七八年三月十二日であったことがはっきりした。この日付も評伝執筆中に私が最も知りたかったと思っていた伝記的事実の一つであった。

それに加えて、正脩の手紙（第三部一・1・一六）から、同志社卒業後東大予備門への進学を薦めたのが、上京して陸軍士官学校の教官をしていた長兄多見であったこと、そして進学の相談を受けたのが、岡山から同志社を経て東大予備門に入學していた友人の高野重三であったことが分かった。高野から祝に宛てられた大学入試についてのアドヴァイスの手紙（第三部二・51・一、二）は試験科目・出題範囲・勉強の仕方まで触れていて実に懇切丁寧である。

東大予備門に入學してから大学院に進むまでに祝が受け取った書簡類は、残念ながらもたたく残されていない。おそらく八九年一月の寄宿舎の火災で灰塵に帰ってしまったためであろう。思想の方向

性が固まりつつあった大学時代に学友たちとかわされたはずの議論を知ることができないのは、大西研究において大きな損失である。ただ、九〇年以降の谷本富からの書簡（第三部二・57・二〜九）によって、祝は谷本の意見を聞きながら『良心起源論』を執筆していたことが明らかになった。今後谷本の思想と祝の良心論とを比較検討する必要がある。

九一年に祝は早稲田に就職するが、弟子たちからの手紙は、職にあったこの時期には少ない。かえって同志社関係者からのものが目立っている。とりわけ九三年六月の同志社生徒代表十二名による教授就任依頼（第三部二・63・一）からは、祝がいかに母校に戻ることを期待されていたかがひしひしと感ぜられる。

また、この頃の祝の内面を知るための資料としては幾子宛の書簡が参考になる。たとえば、評論「当今の衝突論」（一八九三年七月）において、「若し一哲学者の大真理と信ずる所を非真理とせよと命ずる如き国家の元首あらば、其哲学者は縦令断頭台上の露と消ゆるとも其信ずる所を枉ぐ可からざるにあらずや」と、

御用学者井上哲次郎を激しく攻撃していた祝が、同じ時期に婚約者には、「恋しき幾子さま、君がなさけに我心を浸しめ給へ。わが胸中大志なきにあらず、但だ君の情けなくば此世を何とかせん」（第一部一・9）という熱い恋文を綴っていたことは、学問的なこととは別に、単純にニヤニヤしてしまう。

さらに九六年に同志社とアメリカンボードとの関係をめぐって生じた社内での分裂事件では、二派に分かれた教員勢力の両方から教授就任を要請されている。事件は小規模ミッション教育をあくまで主張していた小崎弘道校長が退陣し、普通教育を重要視する横井時雄が校長となつて決着するのだが、その時小崎とともに辞職した浮田和民を早稲田に迎えたのは祝であった（第三部二・13・七）。

同志社全学を挙げての招聘を固辞した理由は祝の書簡が残されていないので不明であるが、当時の祝は早稲田に勤める一方でユニテリアン運動にも深く関係していたので、そのことが東京を去り難くする一因であったかもしれない。その指導者クレイリーマコウレーからの手紙（第三

部二・88・一)は九四年三月に届いている。その頃からユニテリアン主義の先進学院にも出講していたのである。また、日本最初の倫理学会である「丁酉懇話会」の初期の活動の様子は岸本能武太・中島徳蔵らの書簡から、「社会主義研究会」の活動については佐治実然の手紙から伺い知ることが出来る。

従来までは九八年から始まる欧州留学中の祝の動静は限られた資料しかなかったが、本書はこの期間に書かれた手紙を多数含んでおり、日常生活については幾子宛の書簡から、また勉学については友人宛のものから詳しく分かるようになった。とりわけ第一部第四章に収められている大塚保治宛の一九通は、フォルケルト・リープマン・オイケンらの講義の様子を伝えていて興味深い。

留学先ではからずも病にかかって帰国した九九年九月以降の療養生活についても、転地先からの手紙が多く残されているので、この最晩年の時期の祝の苦労を知ることが出来る。死去する年の春に京都から幾子に送った手紙には次のようにあった。「病氣に罹りては返すがえすも

残念なる事のみ多く候。何事も此方が病氣になりしからにて今更悔しき限りに候。殊に気分弱くなる病氣に候故困り候。唯々頼り致すはそもじがしんぼうにて候」(第一部三・14)

本書の意義

哲学的関心から読もうとする人は、本書の分量が膨大であるのに比して、祝の思想に直接関連する資料がそれほど多くはないことについて、あるいは拍子抜けの感をもたれるかもしれない。とはいえ、それでも本書は祝の思想形成に関して多くの新しい事実を明らかにしている。彼の思想と、今日では忘れられつつあるジョージラッドやハロルド・ヘフディングの哲学との関係などは、早稲田大学図書館所蔵の『大西祝関係資料』などを活用することによって、もっと深く研究されてもよい課題であろう。

もっとも、研究者としてではなく一人の読者としてごく素直な感想を述べるな

らば、私が感銘を覚えたのは、書簡から滲み出ている大西祝という一人の人格の重みのほうだったのである。結婚前の祝と幾子が交わした恋文や、留学中や帰国後の転地療養の間に書かれた互いを気遣う手紙の数々は、感動的である。それぞろの手紙を通じて祝は私たちにあたかもこう語りかけているようだ。「記憶して下さい。私は斯んな風にして生きて来たのです」(漱石『こころ』)と。

* 『大西祝・幾子書簡集 付大西祝宛書簡』石関敬三・紅野敏郎編、A5判函入上製、六六〇頁、一三三六〇円、九三年三月教文館刊

(ひらやま・よう 静岡県立大学助手)

書評 大貫隆 著

リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ

『マルコによる福音書注解I』

A五判、二九六頁、一〇〇〇円、九三年四月刊
日本基督教団宣教委「現代の宣教」のための聖書注解書 刊行委員会発行

久保田 文貞

はじめにお断りしておくが、筆者は一介の伝道者であり、注解書というものに対しては「読者」消費者にすぎず、本来書評をものするような者ではない。それでも今回お引き受けしたのは、第一にこの注解書シリーズが、これまで私が関心をもって見守ってきた、日本基督教団

(以下教団という)宣教委の聖書注解書刊行委員会から出されたものであること、第二に、私事であるが、私が神学大学を退学して初志を失いかけていたとき、新教出版社四階で毎週、思えば贅沢なことに大貫隆氏と土岐健治氏共同の

ゼミで、ほんの小人数であったにもかかわらず、新約学の手ほどきをうけることができた、その遅ればせながらの氏への感謝の意をこめてのことである。

まず、この注解書シリーズの誕生の経過について述べておこう。第二五回教団総会に、宣教委は、天皇代替わりの事態にむけて「今日の宣教において直面している課題の確認とその推進に関する件」という議案を提案した。これは、①

新しい天皇制支配の動向に対処する、教団の声明、②教団の教会等で「日の丸」「君が代」「元号」を使用しない、③「天

皇代替わりに関する情報センター」を積極的に支援する、④いま、宣教を考えるための「聖書注解書及び基本図書」発行に関する件、という四つから成っていた。しかし、その総会は、四つを一括して決議することに反対との意見を受けて、結局前者二つを決議し、④は常議員会付託にされた。

宣教委が前者の三つに加えて聖書注解書刊行を提案した理由には、次のように書かれている。

「教会の存在と活動の基本が『聖書』にあり、そこから『宣教』の業も導き出される限り、…：教会の語る言葉や行動と切り離して置くことはできない。むしろ、現実の諸問題の中で言葉を語る教会が、常に柔軟で新鮮な目で聖書を読み直すとき、真にその現実の諸問題に対して教会からの説得力のある言葉が語られるのである。」

そのために、聖書の、「文章上の絶対化」、聖書本文の「記者の意図やそれととりまく歴史的事情を無視」した「恣意的な解釈」ではなく、「現代の諸状況を